

パリ留学生人肉食事件

安田雅企

思想の科学社

安田雅企 (やすだ・まさき)

東京都出身。都立八中、都立小山台高校、明治大学仏文科卒。中学校教員、東急ストア事務員、古本屋・印刷所経営、翻訳業を経て、現在編集プロダクション会社役員。

雑学倶楽部、仮面の会、思想の科学研究会、駿河台文学、カトリックジャーナリストクラブ、現代文化協会、土偶会各会員。「個性」同人。東京犯罪研究会主宰。

著書 犯罪ドキュメント集『犯罪ブルバール』

秀英書房 (電03・863・7508)

住所 〒167 東京都杉並区井草2の13の17

〈検印省略〉

著者	安田雅企
発行人	加太こうじ
発行所	思想の科学社 東京都文京区後楽二一六六一二
電話	〇三―八一三一―七四五
振替口座	東京五一八九〇七二
印刷	株式会社光文社
製本	株式会社豊文社
発行	一九八三年十一月三十日第一刷発行
定価	一四〇〇円

目 次

第三部 サンテ刑務所独房43号……………137

多くの犯罪者の父親は、お詫びのために自殺、辞職してきた。だが佐川の父はちがった。社長は辞めたが取締役には残った。事件後病床に倒れた妻をかばい通し、またマスコミ攻勢にも逃げずにきちんと立ち向かった。事件後渡仏、なりふりかまわず息子を助けようとした。未熟児で生まれた一政を、医者に見放されたにもかかわらず、必死の思いで育てた。必ず社会復帰させてみせるとかかわらず、かかわず、必死の思いで育てた。必ず社会復帰させてみせるという決意を固めているともいう。他人はそれを過保護だと言うかもしれない。しかし私はこれほどの父性愛をかかつて知らない。

第四部 サンテ刑務所からアンリ・コラン病棟へ……………183

佐川一政の行為は、常人にはわからない。わかりたいなら、こっちが精神異常にならねばならない。当人が霧の中でこんとんとしているといっているのだから。しかし私は結論を出さなければならぬ。それは、ルネのセクシーな部分が全部自分の血肉になるという一体性、自己同一性の妖しい歓喜と希求。大人の白人女を食べれば身長が伸び、筋肉がつき、全身が脂ぎり、エネルギッシュになるという、少年時代からの信仰であった——と思われる。

パリ留学生人肉食事件

第一部 事件発生・逮捕

一九八一年六月十七日（水）の日本の各紙朝刊は「パリ十六日発」として、大きく特派員の記事を載せた。

『朝日新聞』は「日本人留学生が殺人」という見出し、「パリで女学生バラバラ」というサブタイトルで、次のように報じた。

「パリ警視庁は十五日夜、パリ大学サンシェ分校（比較文学）の日本人留学生A（32）¹¹東京都文京区出身¹²をオランダ人女学生を殺した容疑で逮捕、十六日朝、そのことをパリ日本大使館領事部に通告してきた。Aは錯乱状態にあるといわれ、パリ警視庁では精神鑑定をする予定。死体はバラバラにさられており、フランスの夕刊紙は事件を一面で大々的に報じている」

同紙の記事を中心に要約すると、六月十三日夕方、パリ西郊ブローニュの森の湖岸で、新品だが安物のスーツケース二個に入った女のバラバラ死体が、散歩中の男女によって発見された。

持って来たのは、タクシーで乗りつけたアジア人。時間は二十時三十分ごろ。タクシー会社を当たると運転手がすぐわかり、Aのアパートを突きとめた、など。重大なのは、最初からAは精神異常と疑われていたことだ。

ブローニュの森は娼婦の稼ぎ場としても有名だが、オゾンを楽しむドライブウェイ、サイクリングコース、ジョギング、散歩と、パリ市民の憩いの場となっている。湖畔にはシャレたレストラン、カフェがあり、芝生の上では家族連れがサンドイッチを頬張り、シーズンになるとボートが漕ぎだされる。

事件当時パリは夏時間で、まだ明るかった。アジア人——Aは、最初から放心状態で挙動がおかしく、自分の行動を隠蔽しようという態度が見られなかった。後でわかったことだが、A——佐川一政（三十二歳）は、森以外に捨て場所を考えていなかった。まるで、頑固な固定観念のようで、郊外に山、畠、藪があることを忘れていたみたいだ。確かに佐川は、森の近くに下宿し、そのレストランで食事したりして土地カンがあった。だがこの「固定観念」と無警戒振りは、後々まで問題となる。佐川はタクシーからスーツケースを二個出してもらおうと、手押し車を押しまっすぐ池へ向かった。ちよっとしたゴミでも公道、公園に捨てるのを咎めるフランスで、これは気違い沙汰で、まるで「注目してくれ」といっているみたいだった。

この事件には、最初から誤報が多かった。捨てようとした日時、回数などは初めからバラバラだった。

た。特に目立った「誤報」は、某大手新聞社が発行している週刊誌だった。

「サマータイム（夏時間）を実施中のパリは、夜といっても十時ごろまで明るい。そんな人通りの多いころ、ブローニュの森の中心部にある池のボート乗り場に、重そうなトランク二つを持った、小柄なアジア系の男がやって来た。男は無言のまま、池の端から約五十メートル離れた中の島へ向けてボートをこぎ出した。

そこで、トランクを中の島に下ろし、木がこんもり茂った水際までトランクを運んだ。そして水際の草をむしり、トランクの上にはらまいた。奇妙な仕草だった。

たまたま、中の島にいたアベックがこれを目撃、不審に思つて、

『なにをしているの？』とその男に声を掛けた。男はギョツとして、二つのトランクをその場に残したまま、ボートに飛び乗り、あわてて姿を消した。アベックが、そのトランクに近付くと、一方のトランクから血がしたり、壊れたトランクのすき間からは、切断された人間の手のぞいていたのだ」ところが佐川一政著『霧の中』を刊行した『話の特集』編集部作成の「年譜」によれば、

「八時三十分頃、下湖の周囲までスーツケース二台を荷物車に乗せ押して行き、池に捨てようとしたが、疲れたので、荷物車を木にしぼりつけ、うとうとする。気づくと、散歩中のカップルがスーツケースにさわっていた。『私のだ、私のだ！』と慌てて叫ぶ。カップルが去り、しばらくすると今度は男がスーツケースにさわっていた。『おまえのの？』と聞かれるが、『違う』と答えてしまう。男はスーツケースをあけ、血染めのシャツを発見、警察に通報する。一政は急いでバスに乗って部屋に逃げ帰った。街中が夕陽で真赤だった——と、別の事件のように異なっている。

話の特集編集部は、約二年を費やし佐川と文通し、原稿を何回かに分けてフランスの刑務所から送ってもらっていた。疑問点はそのつど手紙で佐川にただし、確認してきた。

だから、重大な記憶ミスさえなければ、本人のいうことが一番正しいはずだ。だが、時間の経過とともに本人もわからなくなったり、無意識に脚色というか、作り変えてしまっている恐れが十分にあら（本人も認めている）。

大方の報道は、ルネを池の底を永遠の墓場として水葬してやりたかったが、池にたどりつくまでに男女のカップルに見咎められ、アワを食って逃走したというものだった。

ボートに乗った、は論外として、話の特集の「年譜」の、うとうと眠ってしまったというのも、問題だ。これこそ『霧の中』の作者である佐川が記憶力に関して自信がないと認めている、無意識のあるいは、善意の脚色ではあるまいか。

射殺後、とめどなく流れる血を、タオルで何回も拭き取った。ふと、外部から見えるはずなのに窓から「誰か見ているかもしれない」とおびえきり、慌ててカーテンをしめる小心者が、いかに疲れているとはいえ死体の入ったケースの脇でうたた寝できると思えない。眠ったのではなく、これは脳波異常による一時期の意識喪失ではあるまいか。強烈な衝撃、緊張、歓喜、満足、不安、恐怖がいちどきに襲ってきて、感受性の通信回線はオーバヒートしていたのだから。

パリ警視庁凶悪犯罪取締本部の刑事たちが、森へかけつけ最初にしたことは、スーツケースを開け解体された娘の死体を調べることだった。一つは頭部と脚部、もう一つには腹部がつまっていた。「犯人はケースを斜面から転がしたが、水面まで達してないのを確認せず逃げた」ので、取り出すの

は楽だった。遺体は「腐敗していなかった」(『ル・マタン』紙一九八一年六月十六日)という報道もあるが、真夏のように暑い日が続いていたその当時、死後四十八時間経ち死臭も立っていなかったというのはおかしい。

バラバラの肉塊を司法解剖すると、致命傷は後頭部(後に首に変更)に被弾した22口径ライフル銃弾。ドボンジュ博士の検死報告書によると、死亡推定時刻は十二日(金)か十三日(土)の朝方(実際は六月十一日(木)の午後四時ごろ)。被害者は中肉中背……二十五〜三十歳くらいの欧州人。

共産党の機関紙『ユマニテ』も、大きく報道した。同紙の特徴は、犯人を「四十歳くらいのアジア人」としたこと。犯行日は六月十一日(木)と正確に打ち出した。

犯罪課では肩口から切断された腕から指紋をとり、警視庁にある中央指紋保管センターで照合したが、ムダだった。女には前科もなく、また、一度も裁判事件を起こしてなかったので、記録がなかった。

同時にパリ市内の各警察署に行方不明の娘の届出はないか指令を出し、調査を始めた。

なにしろ世界各国から留学生が集まっている。アラブ、アジア、黒人系でないから密入国はありえないが、留学生となると骨だった。単身パリでのアパート住まいは、移動率が高く、生活が孤立しているので一、二カ月姿が見えなくても不審に思う人がいない。

死体が入っていたケースの寸法は八十×五十cm。栗色の厚紙製で、よくスーパーで安売りしている代物。新品なので、犯人が死体を入れるため最近購入したまでは予測がついたが、売った店を探すのは難儀だった。当のアジア人が行けば身体的特徴で早く割れようが、フランス人に代理で買わせたら

難しい。

性的快樂殺人の特徴は、乳房への損傷だ。乳首を噛み切っている例も多い。女性器をめった切りにしたり突き刺したり、陰毛を焼き切ったりするのは、嫉妬した夫、愛を拒否された、元愛人などに多い。

腹部が切り裂かれ、胃、大腸、小腸などの臓器が除去されていたが、これは有名な切り裂きジャックや、最近ではヨークシャーの切り裂きジャックこと、ピーター・サトクリフの手口だった。

今までは、なんらかの理由で女性を憎悪している犯人が、娼婦を切り刻んできた。

正常者はぬるぬるした粘膜、ひよろひよろした器官など、触れるのも嫌だ。だが、「表面は着飾って澄ましているが、実体はこれこのとおり、不潔でグロテスクなんだぞ」と自己納得し公開するため、犯人は大抵、臓器を開陳する。

切り裂きジャックは娼婦の腸をたぐり寄せて引き出すと、壁に吊るした。

「これでも食らえ」とばかり、口もとにトグロを巻かせて置いた。マフィアの世界では裏切り者はペニスを切られ、自分の口の中に押し込まれる。被害者は、自分のペニスをくわえぶっ倒れているのだ。切り裂きジャックの残忍な遊び、サディスティックなリンチと、今度の死体の無数の傷は似ていた。

犯人と見られるアジア人はパリへ旅にきて娼婦を買い、支払いかサービスでもめ、殺したのか。女性器がついていれば荒淫の徴候などで、娼婦か否かすぐわかったが、すっぱりえぐられていた。強姦でも屍姦でも、コンドームを使う例は少ないから、精液から血液型が割れる。だが、性器が欠落していたのでそれも望めなかった。

切斷のしかたは乱暴で、極めて不器用だった。刃物を扱った経験がないらしく、いい加減でなげやりだった。

だから一部の刑事は、アメリカで近年急成長しているオカルト宗教の儀式、たとえば黒ミサか黒魔術のイケニエ説をとった。極端なSMプレイの果ての殺人、という見方をする人もいた。現にパリでは、ホモやマゾが全身ムチ打たれたり切り刻まれて、よく殺されている。

するとその連想は、ハリウッドの美人女優、シャロン・テートらを惨殺したチャールズ・マンソン一味のことに飛んだ。フラワー・チルドレンと称された健康でセクシーな娘たちは、操り人形のように、十六歳から刑務所に出入りしている小男、マンソンの命令を聞き、殺人に加担していた。マンソンの声を聞くと陶醉し、彼が歌い出すと性的な身震いを感じ身を任せたくなるというのだ。マンソンはこうした人心操縦術を新宗教の「サイエントロジー」から学んでいた。

余りにも稚拙なナイフの傷、臀部や太ももの肉をはぎとっている謎に、刑事たちの想像はいつになく迷路に踏み込んでいった。

たとえば犬の血を好んでするオカルト教団、乱交、ポルノ・ビデオを重視する派。悪魔崇拜主義者や神秘的秘密結社、仮面乱交パーティー十宗教儀式に、メキシコやプエルトリコ人の死体、豊満な体つきの娘を提供するグループ。そうしたものとからんでいるというのだ。

小人のように小さいアジア人が、通称「島の別荘」の前で捨てて行ったということが、さらに不気味さをかき立てていた。

無表情で何を考えているのかわからないアジア人。

そのアジア人の顔を目撃した男女は『ユマニテ』紙ほど極端ではないが、「年は三十四から三十六歳」と証言した。当時犯人佐川一政は三十二歳。

日本人、とくに女性は、欧米では十歳くらい若く見られるのが常識なのに、子供のよう小さい佐川が全般的に老けて見られていたということは、やはり注目値する。殺人にものすごいエネルギーを使い果たし、憔悴していたせいと思われる。

佐川は、台車のようなものにスーツケースを載せ、押しながら斜面を降りて行った。

個人主義が徹底し、他人のことには関わらないフランス人でも、彼の行為は目につき、「何を捨てるのですか」ときかれた。何しろ市民の憩いの場になっている公園の池に、粗大ゴミを捨てようとしたのだ。見咎められることを予想しなかった犯人は、まことにどうかしている。

注意され、彼は初めて覚醒する。犯人は、その声でひどく狼狽し、スーツケースをほうり出して逃走する。

当時パリでは、バラバラ事件が多発していた。とくに一九八〇年には三件も発生。

第一は十二歳の少年が一九八〇年三月末、パリ（四区）の駐車場の地下でバラバラに切り刻まれて発見。当時ヨーロッパでは、^{青い}バレ・ブルー^{ブルー}と称し、少年少女のポルノが流行っていた。ホモが少年に目をつけ、少年の全裸写真や性交写真が売れていた。五、六歳の少女との肛門性交のビデオテープが珍重されだしていた。

第二は同年四月七日、バンセンヌの森で散歩中の人々が、偶然つまずいたビニール袋から、女装した男性のバラバラ死体発見。女装趣味は日本でも根強いファンがいる。クラブに集まり化粧したり下着